

[課題演習報告]

高等学校における観点別評価導入期に関する考察 —教科部会による評価ルーブリックの作成・活用に焦点を当てて—

萬 徳 和 範

Kazunori MANTOKU

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース
福岡県立光陵高等学校

(2022年1月12日受理)

本研究は、高等学校の観点別評価導入期において、評価ルーブリックの作成及びそれを用いた授業改善の取組を通して、教科部会の自立的なマネジメント体制の構築と、生徒を適切に評価するための評価システムの開発を、事例研究を用いて明らかにすることを目的とした。同時に、実践研究を通して、その過程における教員の意識変容を分析することで、高等学校における観点別評価導入の在り方を究明した。そのために、教科部会を校務分掌と連動させ、評価ルーブリックモデル・授業モデルを作成し、教科部会を中心に授業改善を展開するとともに、自立的・継続的なマネジメント体制の確立を促した。

その結果、教員の意識に変容が見られ、観点別評価に対する意欲が向上するとともに、教科部会における協議が活性化した。さらに、教員の指導改善に一定の成果が見られ、評価ルーブリックの作成が評価システムの開発に効果的に作用することが明らかになった。

キーワード：観点別評価，教科部会，マネジメント体制，評価ルーブリック，授業改善，学習改善

1 主題設定の理由

(1) 学習指導要領上の要請から

2022年度から年次進行で展開される高等学校学習指導要領(平成30年告示)において、現代社会を主体的に生き抜く力を身に付けさせるための評価の在り方についての言及は、「知識及び技能」

「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」という新たな3つの観点として示された。それに伴い、2020年度の「大学入学共通テスト」では、従来の「知識及び技能」重視型から「思考力、判断力、表現力等」が重視される入試システムへと移行した。

このような状況から、高等学校においても、生徒の能力を多角的に評価するための観点別評価の在り方を吟味し、従来の「知識及び技能」重視型の評価を柔軟に改善していくことが求められている。また、観点別評価が有効に機能するための授業改善に学校全体で取り組むことが急務である。

(2) 学習指導上の要請から

「学習評価の在り方ハンドブック」(2019)では、教員間、教科間の観点別評価の不均衡によって、生徒が学習意欲を失うことが指摘されている。事例として、日頃の学習時間や家庭学習が成績に反映されないという現状から、生徒が「何を」「どのように」勉強すればよいか分からず、学習意欲を失ってしまうことが示されている。

このような課題を改善するために、観点別に評価規準を設定・提示し、「何を」「どのように」学ぶ必要があるか理解させることで、生徒の主体的な学習改善を促すとともに、その能力を多角的な視点から評価することが求められている。

(3) 勤務校の要請から

福岡県立学校等教務主任研究協議会(2019)が実施した調査を、2013年度と2019年度で比較すると、「観点別評価を実施している」と回答した学校は、9%から48%に増加し、「実施しているが教科間にばらつきがある」と回答した学校は、60%から22%に減少している。2019年度で見る

と、95%の学校が何らかの形で観点別評価に取り組んでおり、2022年度からの実施に向けて、今後も各学校で改善を続けることが予想される。

本研究は、研究者(萬徳)が勤務する福岡県立光陵高等学校(以下光陵高校)を対象としている。光陵高校では、観点別評価に2019年度から組織的に取り組み始めた。生徒の主体性を促す方策として、観点別評価の在り方を模索し、教科部会等を通して、組織的に評価方法を協議する体制づくりに取り組み始めた段階である。本研究では、これらの状況に鑑み、導入期の高等学校における観点別評価の在り方を検証することを主題として設定した。

(4) 1年次の研究の概要

1年次の研究では、教科部会を中心に評価ルーブリックを作成し、それをを用いた授業内での形成的評価の実践を目指した。評価ルーブリックの作成を、全教科・科目共通の課題として設定し、作成した評価ルーブリックを用いて各教科で授業改善を展開するなかで、年間を通した評価ルーブリック作成・活用・改善のプロセスを構築し、教科主任を中心とした教科部会のマネジメントを行った。特に、国語科・数学科において、評価ルーブリックを用いた授業改善のための取組を先行実施し、それらを基に本校独自の評価ルーブリックモデル・授業モデルを作成した。

これらの取組により、教科部会のマネジメント体制を確立させ、学年教科・科目別に、評価ルーブリックを作成することができた。また、国語科・数学科による授業改善の取組を通して、評価ルーブリックの項目の具体化や、生徒の振り返りによる学習改善の必要性等、光陵高校で取り組むべき課題を明らかにできた。さらに、本研究に対する教員の意識の差に起因する教科間の取組の差が見られたことや、評価ルーブリックを生かした授業展開が不十分であること等の課題も残っている。

そこで、校内組織を整備し、観点別評価に向けた取組を校務分掌内に位置付けるとともに、校内研修を通して教員の意識統一を図る必要があると考えた。また、評価ルーブリックモデル・授業モデルを用いた授業改善に全教科・科目で取り組むことで、項目の具体化や、評価ルーブリックを生かした授業展開への習熟に継続的に取り組んだ。さらに、教科・科目の特性を踏まえて、評価ルーブリックの作成・改善及び授業改善のための主体的な教科部会のマネジメント体制の在り方を検討しようと考えた。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「観点別評価導入期」とは

光陵高校では、2019年度から観点別評価に取り組み始めた。生徒の能力を多角的に評価する観点別評価開発の初期段階にある。そこで、新たな評価システムを開発し、それに基づいた授業改善を実践する過程における教員の意識変容に着目し、効果的なマネジメント体制の在り方を考察するという意味で、「観点別評価導入期」とした。

(2) 「評価ルーブリックの作成・活用」とは

本研究では、「形成的評価」に着目し、従来の評価方法を見直し、新たに評価ルーブリックを作成する。それをを用いた「形成的評価」を授業改善に繋げるとともに、授業後の教科部会での協議を通して、評価ルーブリックの活用・改善のプロセスを形成する。そのための研究構想図を、図1に示す形で作成した。

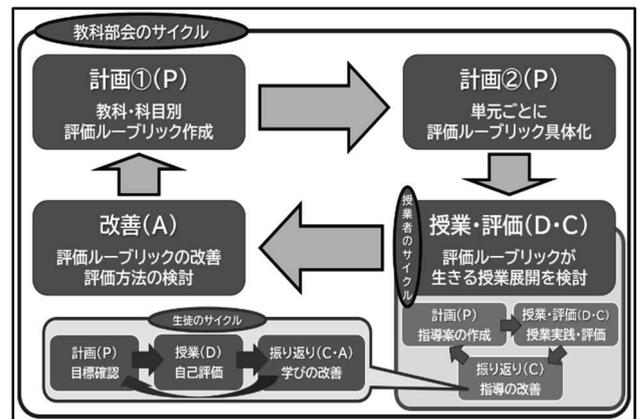


図1 研究構想図 観点別評価導入のためのPDCAサイクル

教科部会を中心に評価ルーブリックを作成し、特定の単位について項目の具体化を行う。それをを用いた授業を実践し、実際の評価に適した項目になっているかどうかを検討する。

作成した評価ルーブリックを用いた授業展開については、各授業担当者で作成し、教科部会において共有を行う。本研究では、導入期であることも考慮し、教科部会において授業展開についても入念に検討を行った。授業実践後は、評価ルーブリックの内容を基に、授業者が自己の指導の改善を行う。また、生徒についても、授業の振り返りを行い、学びの改善を行う。

このような形で、観点別評価の導入に伴う教科部会のマネジメントを活性化させ、授業改善、生徒の能力を多角的に評価する評価ルーブリックの在り方を検討するとともに、評価ルーブリックを活用した教員の指導の改善と、生徒の学びの改善を目指す。

3 研究の目的

本研究は、高等学校における観点別評価の導入期に焦点を当てる。教科部会のマネジメント体制、授業改善、生徒の能力を多角的に評価する評価ルーブリックの在り方を分析し、高等学校における観点別評価導入期の在り方を究明する。

4 研究の仮説

評価ルーブリックを用いた観点別評価の導入及びそれに伴う授業改善を実践することで、授業者が生徒を適切に評価するための評価ルーブリックの在り方や、その作成・活用・改善の効果的なマネジメント体制の在り方が明らかになるだろう。

5 仮説説明の具体的方策

- (1) 学校基礎データについて
 - ① 学校基礎データの作成・分析
 - ② 分析結果の管理職との情報共有
- (2) 県立先進校の実践事例調査について
 - ① 県立高等学校(中高一貫校を含む)の先進校の事例調査
 - ② 調査分析と教員との情報共有
- (3) 校内組織・校内研修の整備・体系化について
- (4) 教科部会を中心とした授業実践について
 - ① 教科部会のマネジメント体制の構築
 - ② 評価ルーブリックモデル及び授業モデルの作成・活用・改善
 - ③ 任意の教科による授業改善の先行実施
 - ④ 次年度の評価ルーブリックの作成
 - ⑤ 教員アンケートの実施・分析について

6 研究の実際

- (1) 学校基礎データについて
 - ① 学校基礎データの作成・分析

観点別評価の実態を把握するために、光陵高校の2018年度・2019年度の卒業生について、①中学校評定(成績評価)、②学力検査得点(入学段階)、③第1学年次評点、④第2学年次評点、⑤第3学年次評点、⑥センター試験得点データ、⑦進学：大学(推薦・一般・センター試験の受験の有無)、⑧進学：短期大学・専門学校(推薦・一般)、⑨就職、⑩その他(部活動・表彰・欠席日数等)をデータ化し、分析した。

分析手法としては、各変数を「相関分析(回帰分析)」「階層別クラスター分析」を用いて比較検討を行った。

②分析結果の管理職との情報共有

光陵高校の実態としては、学力データの階層別クラスター分析を通して、学力上位層・中位層・下位層ともに、非常に固定化していることが明らかになった。現状で用いている評価活動を継続実施するだけでは、学力階層に変化は生じないことがデータとして実証された。

これらのデータ分析の結果については、管理職との情報共有・協議を重ねた。

(2) 県立先進校の実践事例調査について

① 県立高等学校(中高一貫校を含む)の先進校の事例調査

観点別評価の導入にあたって、まずは県内の先進校の事例調査を実施し、その取組を分析した。調査の日程及び概要は表1の通りである。

表1 先進校調査の日程及び概要(2020年)

日程	調査学校名	対応者
5月27日	福岡県立A高等学校	E 教諭 F 教諭(前B高等学校 観点別評価担当者)
6月3日	福岡県立C高等学校	G 教務主任
8月7日	福岡県立D中学・高等学校	H 教務主任

観点別評価の取組について、各先進校の実態は、「考査による評価とその他の評価の割合」「3観点(知識及び技能・思考力、判断力、表現力等・主体的に学習に取り組む態度)の配分」「考査問題に出題している観点の別」という項目順で一覧にすると、図2に示すような結果であった(図2は、調査した4つの先進校を3つのモデルに集約して一覧にしている)。

B高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ 考査による評価:その他の評価 = 1 : 1 ・ 観点の配分(知技:思判表:主体性) = 2 : 1 : 1 ・ 考査問題に「知識技能・思判表」を出題
C高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ 考査による評価:その他の評価 = 5 : 7 ・ 観点の配分(知技:思判表:主体性) = 1 : 2 : 1 ・ 考査問題に「知識技能・思判表」を出題
D高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ 考査による評価:その他の評価 = 64 : 36 ・ 観点の配分(知技:思判表:主体性) = 13 : 5 : 4 ・ 考査問題に「知識技能・思判表」を出題

図2 先進校の観点別評価の実態

各先進校の特徴的な取組としては、教科ごとに観点別評価についての手法が展開していること(B 高等学校・C 高等学校・D 中学・高等学校)、また、数年度ごとに観点別の割合を検討し、改善に取り組んでいる実態があった(C 高等学校)。

②調査分析と教員との情報共有

2020年8月19日に実施した教科主任研修及び25日に実施した全教員に向けた校内研修にて、研究・調査概要、現状の課題と論点整理、今後の活動についての提案を行い、協議の機会を設けて情報の共有化を図るとともに、各教科主任に取り纏めを依頼した。

観点別評価に取り組む意義の再確認、データ分析に基づいた光陵高校の生徒の学力実態等についての理解を深めることができた。教員の関心は非常に高く、光陵高校の具体的な実践を今後どのように展開していくのか、考えを深める良い機会になった。

研修終了後、各教科主任と協議する機会を設けて、今後の活動計画の確認を行った。特に、評価ルーブリック作成の工夫について、具体的な計画の確認を行っている。

(3)校内組織・校内研修の整備・体系化について

光陵高校の課題であった教員間の意識統一を図るための方策として、2021年度に向けた校内組織の整備と、校内研修の体系化を試みた。図3に示す形で、観点別評価と、評価ルーブリックを用いた授業改善の取組を校務分掌内に位置付けた。

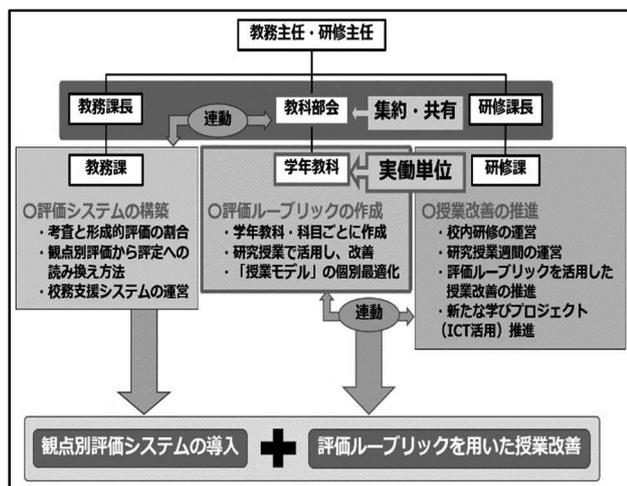


図3 観点別評価導入と授業改善のための校内組織図

まずは、教科部会を中心に評価ルーブリックを作成し、教務課と連動して評価ルーブリックの蓄積を行うことで、観点別評価システムの導入を推進した。また、研修課と連動し、作成した評価ルーブリックを用いた授業改善に継続的に取り組む体制づくりを進めた。

さらに、2016年度より光陵高校が取り組んできた「新たな学びプロジェクト」による授業改善の取組と、本研究の目的である観点別評価の導入を、図4に示す形で関連付け、年2回の観点別評価のための校内研修と、月1回ずつの教科主任研修の機会を表2に示す形で設定し、校内研修の体系化を図った。

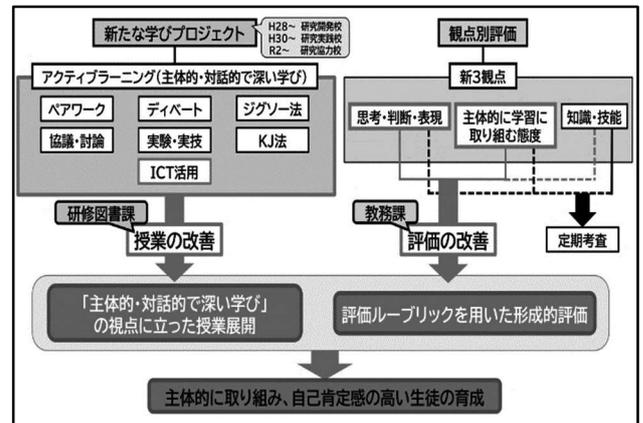


図4 新たな学びプロジェクトと本研究の関連性

表2 観点別評価導入のための校内研修一覧(2021年)

日程	内容	対象
4月7日	協議「第1回研修会とその後の取組」	教科主任
4月21日	講義：「評価ルーブリックの意義と具体的な実践例」	全体
5月27日	協議「評価ルーブリック作成の進捗」	教科主任
6月16日	協議「評価ルーブリックの改善」	教科主任
7月9日	協議「教員アンケート結果分析」	教科主任
8月27日	講義：「評価ルーブリックの各単元の具体化について」	教科主任
10月20日	協議「後期研究授業に向けて」	教科主任
10月22日	講義：「ICTを活用した授業内評価の充実」	全体
11月10日	協議「次年度の評価ルーブリック作成」	教科主任
12月17日	協議「評価ルーブリック作成の進捗」	教科主任

1学期の取組として、4月21日に、教員全体を対象とした第1回校内研修を実施した。その後、教科・科目ごとに協議を行い、年間を通した評価ルーブリックの作成と、1学期に実施する研究授業週間で扱う単元を想定した評価ルーブリックの具体化を行った。作成した評価ルーブリックを基に、各教科において研究授業を実施した。

2学期の取組では、校内研修のなかで、単元評価計画の作成に取り組んだ。1学期の内容を踏まえ、評価ルーブリックの項目を単元ごとにどのように具体化すれば良いか、教科・科目ごとに協議を行った。特に、「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を具体化した。そして、具体化した評価ルーブリックの項目を生かすためにどのような授業展開が必要か、また、どの段階で評価を行うべきか検討を重ねた。

(4) 教科部会を中心とした授業実践について

①教科部会のマネジメント体制の構築

教科部会のマネジメントの活性化に向けて、教科間の取組の差を解消し、同質的な授業改善を実践するために、研修主任と協議し、教科部会における「協議の柱」を設定した。2021年度は「評価ルーブリックの作成及び授業での活用方法」「主体的・対話的で深い学びを促す手立て」の2点とした。議題を限定することで、教科間での協議の方向性の違いを無くし、教科・科目の枠を越えた共有が図れるよう工夫を行った。

②評価ルーブリックモデル及び授業モデルの作成・活用・改善

評価ルーブリックの作成に関する工夫として、2021年度当初に、教科主任会において、評価ルーブリックモデルを作成した。教科・科目ごとに、年間を通して育成すべき資質・能力を評価ルーブリックに示し、それを基に単元ごとに評価ルーブリックを具体化する(図5)。それにより、作成にかかる負担を軽減するとともに、指導項目を整理・体系化することができた。

観点	項目	A(すばらしい)	B(できている)	C(がんばろう)
知識及び技能	I()		年度当初に作成	
	II()		単元ごとに作成	
思考力	III()		年度当初に作成	
	IV()		単元ごとに作成	
主体的に学習に取り組む態度	V()		年度当初に作成	
	VI()		単元ごとに作成	

図5 評価ルーブリック作成の工夫

なお、2021年度は試行期間として、1学期・2学期にそれぞれ設定している研究授業週間で扱う単元について具体化する。

また、授業モデルに関しては、2020年度に作成したモデルを用いて、授業実践に取り組んだ。「目標の提示」「活動」「振り返り」の3点を徹底することで、生徒の主体的な学習改善を促すことを意図した。

しかし、多くの教員が「振り返り」を「授業のまとめ」と捉えており、学びに対する生徒の「振り返り」の時間が十分に取れないという課題が残った。そのため、生徒の主体的な学習改善を促すまでには至らなかった。各教科部会等を通して、再度認識の統一を行い、生徒の振り返りによる学びの改善を実践する必要がある。

③任意の教科による授業改善の先行実施

2020年度に、福岡教育大学の教授(以下教授)を招聘し、国語科・数学科について、評価ルーブリックの作成及びそれを用いた研究授業について講評をいただいている。国語科では、研究授業のテーマを「授業で活用するための評価ルーブリックの具体化」と設定し、単元単位での評価ルーブリック及びそれを具体化した各授業単位での評価ルーブリックを作成した。3観点のうち、特に「思考力、判断力、表現力等」の項目について具体化を試みた。さらに、具体化した評価ルーブリックを有効に活用するための授業展開について、教科部会を中心に吟味・検討を重ねた。光陵高校の教員は、「評価ルーブリックの具体化」に課題を感じており、自主的に実践できるようになるためには、同実践を継続していく必要があると感じている(資料1・2)。



資料1 国語科部会



資料2 国語科研究授業

数学科では、テーマを「評価ルーブリックを用いた授業展開」と設定し、ワークシートを用いて、生徒に評価ルーブリックを事前に示すことで、授業者と生徒が授業の目的を共有し、生徒の学習意欲を高めることを目的とした。生徒の学習意欲を高めることに関しては一定の成果があったものの、授業展開と評価ルーブリックの項目との間に齟齬があり、適切な評価までは実践できなかった点が課題として残った(資料3・4)。



資料3 数学科研究授業



資料4 目標共有と振り返り

また、提示した評価ルーブリックの項目を基に、授業のまとめの段階で、生徒に振り返りによる自己評価を行わせた。併せて、自分の得意・不得意を客観的に把握させ、次の授業にどのように取り組むか具体的に記述させた。これにより、自らの学びの改善を意識させ、主体的に次の学習に取り組む態度の育成を図った。

これら2つの授業実践を中心に、その他の教科でも評価ルーブリックを作成し、それをを用いた研究授業を実施した。

2021年度は、前期研究授業週間では英語科、後期研究授業週間では国語科において、評価ルーブリックを用いた授業改善のための取組を先行実施した。両教科ともに、評価ルーブリックモデル・授業モデルを用いて、項目の具体化と、振り返りによる生徒の主体的な学習改善を狙った授業展開を実践している。

英語科は、第2学年のコミュニケーション英語Ⅱにおいて研究授業を行った。レポート作成と授業内での発表及び生徒間相互評価について評価ルーブリックを具体化し、具体化した評価ルーブリックを有効に活用するための授業展開について、教科部会を中心に検討を重ねた。2020年度の授業実践では、評価ルーブリックの項目の具体化に課題を感じている教員が多かったが、評価ルーブリックに基づいた授業実践を重ねることで、少しずつ項目の具体化に習熟できていることは大きな成果である。

また、時間配分の都合で、生徒の自己評価について、振り返りの時間が十分に取れなかったものの、前年度と比較して、学習改善に向けた具体的な記述も見られた(図6)。取組を継続し、より主体的に学びの改善に向かう生徒を育成したい。

生徒の振り返り	授業の感想	課題の把握
フェアトレードの商品は飢餓・貧困をなくすことはできるけれど、値段が高いことが課題だと感じました。	今回発表をして、人前で話す経験ができたので、 <u>自信を持って色々な場面で生かしたいです。</u>	
自分が知らなかっただけで、いろんなSDGsに関連した商品が売られているんだと分かりました。 <u>これからはもっと詳しく調べたいです。</u>	人前で発表する難しさと緊張感を忘れずに生かして、 <u>これから人前で発表するときはもっとクオリティをあげようと思いました。</u>	

図6 英語科 生徒の振り返り

国語科は、第2学年の現代文Bにおいて研究授業を行った。単元独自の評価ルーブリックを、表3に示す形で具体化し、それをを用いた指導案を教科部会にて検討・作成した(図7)。授業展開として、単元導入時を設定し、本文読解の前段階において自説を記述させ、その内容を基に「思考力、判断力、表現力等」を評価するとともに、振り返りによる生徒の主体的な学習改善を狙った。

目標：日本の人称を複数挙げ、その特徴や法則を考察し、明確に文章化することができる。【思考判断表現力】 振り返りの中で本時の評価ルーブリックを基に客観的に自己評価できる。【主体的に学習に取り組む態度】		
学習活動・内容	手だて(○)と評価(◇)	形態
1 導入(目標の提示) ・診断クイズ「あなたが使う一人称を当てます」 ・本時の目標を確認する。	○診断クイズを通して、様々な1人称・2人称があることに気づかせる。 ○本時の評価ルーブリックを提示する。	一斉 一斉
【目標】 日本で用いられている人称について、その特徴や法則を自分なりに考察しよう！		
2 活動 ・人稱について自分なりに考察する。 ①自分が知っている1人称・2人称を挙げる ②その特徴や法則を考察する ③発表用にとめる	○できるだけ多くの人稱を挙げさせる。 ○具体的な人物や自分の体験から、人稱についてどのような特徴や法則があるか考えさせる。 ◇ワークシート提出	個人
・ペアワークで発表することで考察を深める。 ①隣の生徒とペアになり、発表し合う ②発表をもとに、自分の考察を付加修正する	○発表者：2分で自分の考えを伝えさせる。 ○聞き手：必要に応じてメモを取らせる。	ペア
3 振り返り ・自己評価に取り組む。	○本時の目標の達成度を客観的に評価させる。 ○客観的に振り返らせ、学びの改善に繋げる。 ◇ワークシート提出	個人

図7 国語科学習指導案

目標の提示から振り返りまでの展開がスムーズに行われ、生徒が「何を」「どのように」学べばよいのか理解できたとともに、生徒の振り返りによる自己評価においても、より具体的に学習改善に向かう記述が見られた。これらの取組を、今後は全ての授業で実践するため、校内研修や教科部会を通じた周知・共有が必要である。

④次年度の評価ルーブリックの作成

2年間の評価ルーブリックの作成と、それをを用いた授業改善の取組を踏まえ、2022年度に向けた評価ルーブリックの作成を開始した。年間を通じた評価ルーブリックを基盤に、各単元の評価ルーブリックを具体化する予定である。生徒を適切に評価する評価ルーブリックを作成できるよう、教科部会において検討を重ねている。

表3 国語科単元評価ルーブリック

観点	学習内容	評価規準(評価ルーブリック)
知識及び技能	・自らの主張を適切に表現するための語彙を正しく選択し、文章化する (学習指導要領解説 第2章 3論理国語 3内容 知識及び技能 (1)イ)	A 自らの主張を適切に表現するための語彙を正しく使用することができており、且つ、文章全体を矛盾なく論理構成できている
		B 自らの主張を適切に表現するための語彙を正しく使用することができている
		C 自らの主張を表現するための語彙を正しく使用しようと努力している
思考力判断力表現力	・日本で用いられている人稱について、その特徴や法則を自分なりに考察し、文章化する (学習指導要領解説 第2章 3論理国語 3内容 思考力判断力表現力等 A書くこと (1)エ)	A 日本で用いられている人稱を複数挙げ、その特徴や法則を客観的に考察し、根拠や論拠を示しながら明確に主張することができている
		B 日本で用いられている人稱を複数挙げ、その特徴や法則を自分なりに考察し、明確に主張することができている
		C 日本で用いられている人稱を複数挙げることができている
主体的に学習に取り組む態度	・授業の振り返りのなかで、自己を客観的に評価し、粘り強く学習改善に取り組む (「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 第1編 第1章 4 (3)「主体的に学習に取り組む態度」の評価について)	A 振り返りの中で本時の評価ルーブリックを基に客観的に自己評価できており、且つ、自らの課題とその解決のための手立てを明確に理解できている
		B 振り返りの中で本時の評価ルーブリックを基に客観的に自己評価できている
		C 振り返りの中で本時の評価ルーブリックを基に客観的に自己評価しようと努力している

8 成果と課題

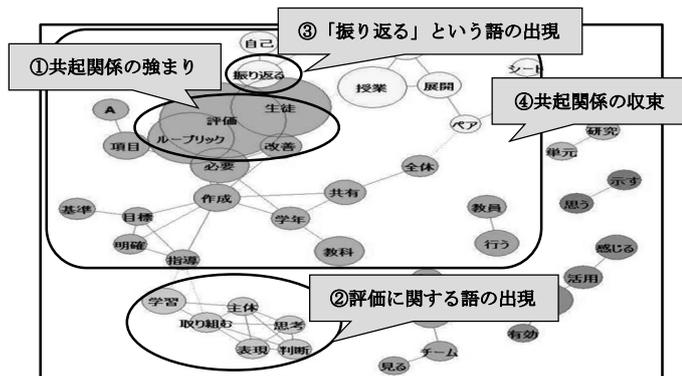


図 11 共起ネットワーク分析結果 (2021 年 11 月 総抽出語数 1,334)

特徴的な変化としては、次の点が挙げられる。

- ① 「評価」「ループリック」「生徒」という語の共起関係の強まり
- ② 「思考」「判断」「表現」, 「主体」「学習」「取り組む」等の評価に関する語の出現
- ③ 「振り返る」という語の出現
- ④ 全体的な共起関係の収束

①・②の変化から、教科部会の内容が、従来の教材観や単元観に関する協議から、評価ループリックによる生徒の評価方法に関する協議に移行したことが読み取れる。また、③の変化から、授業モデルに示した振り返りによる生徒の自己評価が浸透し、学びの改善に取り組む土壌が出来つつあると読み取れる。④についても同様に、観点別評価と評価ループリックを用いた授業改善の意義を教員間で共有でき、具体的な評価方法を模索しようという意識に変容していることが確認できる。

(3) 教員アンケート自由記述結果(抜粋)

観点別評価の導入と評価ループリックを用いた授業改善の取組を継続するなかで、アンケート自由記述の内容にも変化が見られ、表 6 に示すような感想が表れた。

表 6 教員アンケート自由記述抜粋(観点別評価の意義)

- 主体的に学習に取り組む態度について、他の教科ではどのように評価されているのか気になる。
- 学校全体で取り組むことで、他教科の先生方と観点別評価や評価ループリックについて話す機会が増えた。他県の取組にもアンテナをはって情報収集できた。
- 色々なウェビナーに参加することで「評価規準の作成」や「観点別評価の実施」について勉強中である。他の先生方がどのように研鑽されているかを教えていただきたい。

観点別評価や評価ループリックの作成について教科を越えた議論がなされていること、また、他県の取組や、様々なウェブセミナーに自発的に参加し、勉強する姿勢が見られるようになったことは大きな成果であると考えられる。

【成果】

- 校内組織・校内研修の整備により、教員の意識統一を図るとともに、観点別評価と授業改善の取組を校務分掌内に位置付けることができた。
- 評価ループリックの作成を全教科共通の課題として設定するとともに、教科部会における協議の柱を予め教科主任間で共有することで、教科間での取組の差を無くし、教科部会のマネジメント体制を構築できた。
- 全ての教科・科目において評価ループリックを作成し、それを基に各単元の項目を具体化することで、各教科で育成すべき資質・能力を観点ごとに整理・体系化できた。
- 授業モデルを用いた授業改善の試行により、生徒の振り返りによる自己評価を通して学びの改善を実践できるような授業展開を確立できた。

【課題】

- 生徒の能力を適切に評価できる評価ループリックを作成できるよう、単元ごとの評価項目の具体化に習熟する。
- 授業モデルに則した授業展開を全ての授業に浸透させることで、生徒が自己の能力を主体的に理解し、学びの改善を実践できるような授業を継続的に実践する。

主な引用・参考文献

- 福岡県立学校等教務主任研究協議会 2019 新学習指導要領を踏まえた学習評価の実態調査(配付資料)
- 国立教育政策研究所 2012 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(高等学校各教科)～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～
- 国立教育政策研究所 2019 学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編
https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/20201110-mxt_koukou01-000010943_12.pdf (Date:2021/4/1)
- 国立教育政策研究所 2021 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(高等学校各教科)
- 文部科学省 2018 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)
- 文部科学省 2018 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 各教科編

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会に心より感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、関係の諸先生方に多大なるご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます、謝辞といたします。